

心ふれあう

ちょっと

おかやまのちょっといい話

シリーズ ⑭

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様にお届けしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

大好きなおじいちやま

私の友人に、85歳のおじいちやまがいます。

県北の田舎に一人暮らし。知り合ったのはもう25年も前に仕事の関係でした。もう何年もお会いしてないが、季節が変わるといつも直筆の葉書をくださる。私に直筆の葉書を書いてくれる、世界で唯一の友人。その度に心温まり、私も手紙を返すのです。

私は若いころから流行りものが好きで、世の中が右といえば右を向き、左といえば左を向いてきたような生活を過ごしてきました。懲りもせず還暦を迎えた私は、時代に負けまいとスマートフォンを持ち、遅れをとるまいと必死です。ちょっと頑張ってPTAや近所の奥様方とお茶にも旅行にも行き、とにかくいつも社交的で明るい奥様を目指してきました。

一方、おじいちやまは携帯もパソコンも持っていない。

いつも青いインクの万年筆で、味のある文字に挿絵を添えた葉書を送ってくださいる。

そんなおじいちやまが初めて旅先から葉書をくれました。山形でした。そんな遠くに一人で旅行をしていることにも驚きました。

葉書には「会いたい人と場所へ、人生を締めくくる旅」をしているとありました。それから度々ハガキが届きました。宇都宮・茅ヶ崎・長野・名古屋・京都・姫路。

ある冬の朝、チャイムが鳴りました。玄関を開けると、しわくちやの笑顔をしたおじいちやまが立っていました。「やあ」とおっしゃいました。それはまるでお隣さんが訪ねてきた



ような気軽さでした。

きよんとしながら、

「どうしてここへ？」と聞きました。

おじいちやまは「あなたが住んでいるからですよ」。

驚いたのと同時に胸が熱くなりました。

おじいちやまはまだ足腰の立つうちにといい、旅をされているとの事で旅行の話がたくさん聞きました。

もう亡くなっている方はお墓参りをし、入院している方にはお見舞い。思い出の地を訪れてはご本人やそのご家族に感謝を伝えて歩いていこうと、とても真似できない事だと思いました。

「私なんて、お礼を言われるようなことは何もないのに。」と言うと、「私の大切な文通相手ですよ」とおっしゃいました。

「手紙いつも楽しみにしているんです。細やかな気遣い、温かな言葉。唯一無二の存在ですよ。ありがと。」と言われ、感激しました。

そんな言葉、生まれて初めてかけられました。元気をもらっているのはいつも私の方なのに。

その夜、布団に入り言葉を思い返したとき、「私は、もっと私のままでいいのかもしれない」と感じました。若いころから背伸びをしてきたと思うと、閉じた目尻から枕に涙が流れました。

翌朝おじいちやまに手紙を書きました。それは今までで一番長い感謝の手紙になりました。

幸不幸は、財産、地位、あるいは職業などによって決まるものではない。何を幸福と考え、不幸として考えるか、その考え方が幸不幸の分かれ目なのである。

トーマス・エジソン

幸不幸を決めるのは自分自身です。自分にとって本当に大切なものを見つける事が出来れば一番の幸福への近道かもしれません。常に探求する心を持ち続けたいものです。

葬儀・法要・ギフト

あなたのアーバンホール

アーバンホール

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしております。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。

◆応募先/アーバンホール「ちょっといい話」係 〒710-0841 倉敷市堀南805-1 ◆記入事項/①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度(原稿用紙・ワープロいづれも可)にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。